

ホトトギス 創刊二十周年三月二十八日臨時増刊号  
甲戌二十七年八月一日発行 二第百十八巻第八号

# ホトトギス

八月号



## 俳句随想 〔三百九十八〕

汀子

選句について書いて欲しいとの依頼を受けて、書きはじめたのであるが、書きはじめると次々書きたくなくなることが出てきて、はや、一年分をざつと書いてしまった。今まで余り選句について書いていないことに気づき、選句の大切さを再認識する機会になったのではなからうか。それは案外見落としていた分野で、唯、選者任せなどというのではなく、作者も選句を通して作句の糧にするべきだと痛感した。北海道で大会があり、一人の作者が私の側に来られて、選者の選に入らなかつたが、自分の選句と先生の特選が合つたので嬉しかつたと言われるのを聞いて、その作者がどの様な俳句へ対しての勉強をして来られたか判つて感心した。俳句は作るだけが勉強ではない。また、色々な知識、自然の素晴らしさや精緻な発見。人が作つた俳句の良さから学ぶことに自分の勉強方法を広げる、さまざまに勉強があることを私も学んだ。

しかし、してはならないことも沢山ある。人の作品の一部を貰つたり、真似事をしたりすることに馴れてしまうのは恐ろしい。自分の発想がたまにそのようなことに当てはまつたならば、それらは潔く捨てなければならぬであらう。すでに、これまで作られた俳句は限りなく多いと思う。同じ発想を持つ人は沢山いるのではないかとも思う。自然に同じ発想の句が出来たなら、それは潔く自分の句帳にだけ残しておくのもいいが、私は自分の句帳からも消して仕舞うのがよいと思つてゐる。

# 旬日記 汀子

平成二十六年八月三日 下朔旬会

近づきし秋雨降りて雨降りてふと力余りし秋の近きこと西瓜切るつもり人数揃ひけり夏萩に集まつてくる庭の風ともかくも西瓜を食べてからのこと

八月四日 ロイヤル俳壇

雨降りて降りて晩夏の風纏ふまほろばの銀河の下に集ふ会朝顔の蔓の自由を正す朝ふと次の会に心を置晩夏雨止みて空気の甘き晩夏かな

八月八日 アネモネ旬会

秋といふ心に添へば自らまほろばの夜空の親し流れ星人の秋語り尽きたる淋しさよみちのくの秋へ旅立つ身ごしらへ待ちぬたる秋とは違ふ秋となる

八月九日 東北ホトギス俳句大会前日旬会

台風の先の来てある旅の雨みちのくの言葉に馴染みゆける秋震災はなほ過去ならず露けしや

八月十日 東北ホトギス俳句大会

帰路案じたる台風のありどころ

草原の一枚虫に明け渡す  
台風の消息消えず旅つづく

八月十二日 大阪倶楽部

偲ぶ人近づけてゆく墓参  
朝顔の蔓の行方は追はずとも  
稲妻のたぎりに稜線正しけり  
新秋の時間刻々ありしこと  
人偲ぶ心初秋なりしこと  
初秋の書き終りたる一稿よ  
書き終へて初秋の稿として送る

八月十二日 綿業倶楽部

手花火の宵待つ心集ひけり  
六甲の荘に残して来し花火  
みちのくの秋をたづねて来し旅よ  
いつの間に蝸に鳴きかはりしや

八月十四日 清交社

咲き進む色に出にけり酔芙蓉  
旅心夜を更かしたる天の川  
出してみし踊浴衣を又仕舞ふ  
誘はれて誘ひて旅路阿波踊  
朝の雨上つてをりし酔芙蓉  
高原の銀河の空のととのへり

八月十九日 有恒俳句会

蝸に思ひ出一つ加へたる  
風音のそこ集る芭蕉林  
山の端に三日月沈みさうに在り  
蝸に鳴き替りたる夕べかな  
残暑とはいづかをさまる日もあると

気にかかる電話掛け終へたる残暑  
八月十九日 無名会

手花火をするきつけかけを待つことに  
庭師来て秋めく風を残し去る  
残暑なほ仕事の外出なりしこと  
秋めくやこれよりの日々心して  
花火見る時間の柳を外したる  
旅人の秋めく祝ぎのよそほひに  
スケジュール通り秋めく日々なれば

八月二十日 夏潮旬会

邂逅の秋とはなりぬなつかしき  
銀河濃き三瓶の空のはや遠き  
さういへば手花火しまひ置きしこと  
何取りに来しか忘れて花火の夜  
虚子館の次の計画秋めきぬ

八月二十日 祝さわらび

祝ぎ心通ひ合ひたる秋の晴  
八月二十九日 時雨旬会  
棚経に馴染みなきまま待ちけり  
よみ返す手紙のありぬ赤のまま  
稲妻のはるかがありて旅帰り  
この道は通ひ馴れたる赤のまま  
道の辺のいつも見てある赤のまま  
稲妻の気配の中にあるけり

八月三十日 ホトギス社吟行会

雨止んで風新涼に入れ替る  
降りさうに晴れ降りさうに秋の晴  
雨雲に押し出されたる秋の晴

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年八月一日 中村襄介様句集「山眠る」序句

緋 け ば 煌 く 山 の 星 月 夜

八月一日 カトリック新聞選考吟

合 歡 の 花 三 瓶 に 夜 を 近 付 け て

八月二日 鬼貫俳句大賞選考会句会

暑 を 発 ち て 六 百 キ ロ の 街 涼 し

八月三日 野分会声屋例会

残 暑 に は 耐 へ て 君 に は 耐 へ ら れ ぬ

走 馬 灯 人 生 い つ も 待 ち ぼ う け

八月三日 虚子記念文学館投句

草 原 に 牛 を 放 ち て 秋 暑 し

八月七日 蕉心会

磴 上 る 残 暑 よ い し よ と 跨 ぎ つ つ

文 月 や 原 稿 溜 め る こ と も な く

桐 一 葉 未 だ 焼 け て ゐ る 大 地 か な

今 日 か ら は 秋 の 蚊 と し て 嫌 は れ て

咲 く も の を 弄 び た る こ の 残 暑

颯 風 の 近 づ い て 来 る 風 か と し

陸 奥 の 旅 を 控 へ て 秋 暑 し

目 の 高 さ て ふ 底 紅 の 主 張 か な

八月九日 東北ホトトギス俳句大会

み ち の く と い ふ 新 涼 の 在 り ど こ ろ

四 十 年 ぶ り の 花 巻 走 馬 灯

蝸 や 嵐 の 句 読 点 と し て  
初 秋 の み ち の く は 詩 の 宝 庫 か な  
秋 灯 下 詩 心 募 る 記 念 館

八月十日 朝日カルチャー若草句会

星 月 夜 宇 宙 に 近 き 三 瓶 か な

走 馬 灯 君 と の 未 来 回 し け り

朝 顔 の 藍 に 朝 の 始 ま れ り

走 馬 灯 繫 ぐ 俤 あ り に け り

星 月 夜 太 陽 系 に 住 み 古 り て

朝 顔 を 都 心 に 咲 か せ 侘 住 ひ

今 年 又 三 つ 増 え ゆ く 星 月 夜

八月十四日 十筆会

大 文 字 欠 け ゆ く ま で の 静 寂 か な

底 紅 の 底 な る 大 宇 宙

蝸 の ヘ ア ピ ン カ ー プ 鳴 き 移 る

八月十四日 NHK「俳句さく咲く」収録

語 部 の 横 顔 映 し カ ン ナ 燃 ゆ

潮 風 に 冷 ま さ れ て ゆ く カ ン ナ の 緋

八月十五日 「北國文芸」選考吟

生 活 の 灯 遠 蝸 に 点 り ゆ く

八月十七日 野分会東京例会

走 馬 灯 一 周 分 の 恋 を し て

走 馬 灯 極 彩 色 の 夢 を 見 て

走 馬 灯 部 屋 の 真 中 と い ふ 宇 宙

八月十九日 百夜句会

走 馬 灯 君 の 悋 追 ひ か け て

桐 一 葉 恋 語 り つ つ 落 ち に け り

遠 花 火 音 の 歪 ん で を り に け り

八月二十一日 登高会

盆 の 月 泪 の 色 で あ り に け り

玄 関 を 出 る 靴 音 や 今 朝 の 秋

八月二十三日 「さわらび」八百号記念俳句大会

新 涼 の 空 路 八 百 キ ロ の 賀 へ

祝 ぎ 心 乗 せ 秋 天 へ 離 陸 せ り

鱗 雲 筑 後 の 祝 ぎ の 過 客 と も

八月二十六日 若水句会

生 身 魂 九 九 は 五 の 段 ま で と い ふ

ロ ッ キ ン グ チ ェ ア 愛 用 の 生 身 魂

甲 山 よ り 摩 耶 山 へ 初 嵐

生 身 魂 主 宰 の 記 憶 引 き ず り て

初 嵐 縫 う て 賀 の 旅 飛 機 西 へ

桐 一 葉 乾 き 切 つ た る ア ス フ ァ ル ト

八月二十七日 目黒学園句会

花 煙 草 禁 煙 曆 は 四 年 目 に

蝸 や 六 甲 に 星 招 き た る

盆 僧 の 今 日 も 明 日 も 走 る は し る

か な か な に 三 瓶 の 朝 の 動 き 初 む

盆 僧 の す れ 違 ひ た る 交 差 点

み ち の く の 色 に 整 ふ 花 煙 草

八月二十八日 友人の開店祝

新 涼 に 包 ま れ て ゆ く 船 出 か な

八月三十日 ホトトギス社吟行会

声 絞 り 絞 り し ぼ り て 秋 の 蟬

澄 む 水 で ベ ン ツ を 洗 車 す る 主

家 よ り は 徒 歩 一 時 間 秋 涼 し

都 内 て ふ 原 生 林 や 蚯 蚓 鳴 く

八月三十一日 夢二会全国俳句大会前日句会

夢 二 の 絵 露 け き 笑 み で あ り に け り

八 月 尽 夢 二 の 緑 復 活 す

オ ル ゴ ー ル 新 涼 の 楽 奏 で つ つ

# 雑詠 廣太郎 選

今年また一人静かなクリスマス 周南 小川龍雄  
 我家の具てふもありたるおでんかな 同  
 あるもので済ます夕餉や日短 同  
 虚子恋ひの杞陽を恋うて館臙 神戸 千原叡子  
 鼎談に杞陽偲びし臙かな 同  
 花芽抱く焰の如き牡丹の芽 同  
 花の宿庭より上る大広間 東京 山田閨子  
 昨日今日心になふ桜狩 同  
 み吉野の花の間に星ひとつ 同  
 満席の喫水線や花見船 同 橋本くに彦  
 猫の恋をはり野性のどこへやら 同  
 手に受けし色のひとひら花とこそ 同  
 真直に顔に日矢射す絵踏かな 熊本 岩岡中正  
 春寒の浜に遠流の思ひあり 同  
 春寒の荒るる沖より後鳥羽院 同  
 囀の峠に立てば下からも 横手 伊藤とほ歩  
 凍豆腐日々飴色に育ちゆく 同  
 潮騒の綺羅汲み上げし白子干 同

百歳の翁のあくび春の山 神戸 山田佳乃  
 花ひらくやうに生まれし蝶の翅 同  
 うららかやマンダローブは水を抱き 同  
 弔問を済ませてよりの花の旅 長岡 安原 葉  
 振り向けば谷に落ち込む花の雲 同  
 乾きしか落花はじまる雨後の山 同  
 遠くより見えてミモザの家となる 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 庭を黄のあふれ出したる花ミモザ 同  
 一本のミモザの下に住み古りぬ 同  
 法螺の音に近江の春は目覚めけり 神戸 涌羅由美  
 紙塔婆比良より高く東風に舞ひ 同  
 松籟と波音寄する句碑うらら 同  
 切り貼りに躓く光春障子 香川 湯川 雅  
 老遍路杖突いて鈴歩して鈴 同  
 根の自由奪ふ縄目や苗木市 同  
 継ぐ者の決まり春田の息吹き濃し 東京 大久保白村  
 瀬戸の風伊予にやさしく防風摘む 同  
 米朝の逝き上方の涅槃西風 同  
 悠久の大河横たふ初景色 福山 竹下陶子  
 左義長に今なほ平家亡びざる 同  
 福笹にホ句の重さを担ぎけり 同  
 花の雲その懐に塔のあり 奈良 古賀しぐれ  
 神抱く桜大樹に抱かるる 同  
 全快の身に満開の花明り 同

# 雑詠句評（七月号より）

とほ歩・憲明・静龍

中正・眞理子・葉

むつみ・肖子・保佳

美奇・廣太郎

## 灯されてかまくらふつと命得し 東京 岩村恵子

かまくら。秋田県横手地方の小正月行事で、二月十五日に、かまくらと呼ばれる雪洞を作り、その中で子供が遊ぶ。

かまくらに灯される蝋燭の灯は実に柔らかく暖かい。それは、まさに、ふつと、と云う措辞がぴったりである。辺りが暗くなつて灯された雪洞は命を宿し、かまくらとなる。

路地奥にひっそりと、ほんのり灯っている様は、幻想の世界である。

ふつと命得しは、かまくらの本質を余すなく諷詠して秀句となつた。（とほ歩）

秋田県横手市の「かまくら」は、筆者も一度行った事があり、その神秘的な佇まいには感動したが、数多雪で造られた室には水

神が祭つてあり、灯されると「正に生き生きと命の躍動を感じるのである。日本の文化の素晴らしさが、この句の表現によって余すところ無く伝わってくる。（廣太郎）

## 剃り終へて一撫でしたる初鏡 東京 柴原保佳

「剃り終へて」の「剃る」というのは、「剃刀を当てる」ということばがあるように、鋭利な刃物で髭などを根元から切り落とすこと。今風の電気かみそりなどのイメージとはちがう。「一撫でしたる」からは、剃りあとの顔に手を当てたつるつるとしてさっぱりした感触が伝わってくる。なんとしても、この句は、「初鏡」の句。その年はじめて自分の顔を写し出した鏡。しみじみと過ぎた年をかえり見、さらに新しい年への夢を描く明るい顔である。人生への感慨も内にこもっている。瀟洒な表現であつさりしている。現代の「軽み」というのは、こういう世界にもあるであろうか。（憲明）

多くの句で「初鏡」を詠む時、女性を対象とする場合が圧倒的に多いと思うが、この句は男性を対象としている事は一目瞭然である。筆者も含め、男性がひげを剃つた後の仕草として、正に「一撫で」なのである。「初鏡」も効いているし、昔こんなCMがあった。「ウーン、マン〇ム」（廣太郎）〈以下略〉



天地有情

花子選

何となくペンの動きも春めいて  
 わが庭にしら梅の夜のありしこと  
 偲ばるる虚碧椿の赤と白  
 よべ遅き帰宅の朝寝許されよ  
 蕎麦刈りて次の命を待つ大地  
 潮の香を乗せて明石の神渡  
 忌に添ひて庭の白梅開き初む  
 逡巡を重ねて雛流れゆく  
 冬至粥すゝり卒寿をやゝ過ぎし  
 愛蔵の虚子の句茶盃年惜む  
 啓蟄のごとく人出て体操す  
 まなうらの一寸の麦芽を愛す  
 ふるさとの変らぬ山河春めきし  
 波音に夜通し覚めてぬし朝寝  
 よく見れば虫偏なりし蝮草  
 霞むとは丸も四角も霞むこと  
 若者が海へ出かけてよりの涼  
 帆船の見る見る沖の虹の中

神戸 後藤比奈夫  
 同 同  
 長岡 安原 葉  
 同 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同 同  
 吹田 大橋 暁  
 同 同  
 福山 竹下陶子  
 同 同  
 熊本 岩岡中正  
 同 同  
 東京 河野美奇  
 同 同  
 神戸 後藤立夫  
 同 同  
 東京 今井千鶴子  
 同 同

チューリップ花びら広げきつて散る  
 チューリップ散りし一片づつ見せて  
 我もまた霞の中にあるのかも  
 何処までも付いて来る気の春の泥  
 島に句碑建つを見届け鳥帰る  
 みよし野に未練ありつつ鳥帰る  
 雨なればこそその閑けさ寺若葉  
 何となくいつまでとなく春炬燵  
 永き日や幾山河といふ言葉  
 永き日や死のかげといふ谷を訪ふ  
 来し方をひねもす語る雛の客  
 春めきてせせらぎ唄ひ始めけり  
 水音の先へ先へと春流す  
 夕めける風初花の辺りより  
 揺れやすく吹かれ易くて花ミモザ  
 ミモザ咲き辺りは色を失へり  
 指先に広がる野原蓬摘み  
 一ぱいに摘みし蓬のかるさかな

熱海 嶋田 一步  
 同 同  
 神戸 和田華凜  
 同 同  
 千原 叡子  
 同 同  
 東京 高濱朋子  
 同 同  
 群馬 中杉隆世  
 同 同  
 東京 笹倉 潤  
 同 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同 同  
 東京 山田閨子  
 同 同  
 同 岩村恵子  
 同 同

# 沈黙

## 稲畑汀子

長く生きてきた。でも、まだ生きて行けそうだ。人生を振り返ってみると、私自身が最も多感な年頃であった戦争が終わる頃が、大きく今の私の生きざまを左右しているように思う。そして、その多感な時期を過ごした四年間の寄宿生活に培われた何かがあるのではないだろうか、と、しきりに思いはじめているのである。

昭和十八年から十九年の頃、少しずつ戦争が激しくなり、姉は小林聖心女子学院の女学校四年生で卒業させられて、父が勧めた東京の聖路加病院看護婦学校へ入学した。

父は、若い頃、原因不明の発熱のために転院した米国系の病院で手術を受け、烽火織炎と診断されたのが治ったので、その看護の素晴らしさに、姉をそこへの入学を勧めたのである。残された我等姉弟の三人は和田山へ疎開させられ、終戦を迎えた。私は間もなく小林聖心女子学院の寄宿舎に戻された。

十歳頃から俳句会に参加していた私は、寂しくなると俳句を作っていた。そして祖父のもとに手紙と一緒に送っていた。祖父は多感な少女に真面目に応えてくれていた。

厳しい規律の中でも沈黙は特に守らなければならぬものであった。同じように修道院付属女学校で学ばれた芦屋市の元市長北村春江さんとしみじみ話していて共感を覚えた事がある。……キープサイレンスを守って来たものだから、人前でしゃべるのが苦手であるという事だ。春江さんも「えー……、あー……、うん……」と声を詰まらせる。私も後年何を喋ったか覚えていない出たままのスピーチをする。キープサイレンスと言われてそれを、守っていたのを、急に舞台上がって理路整然と喋れる訳はない。

だんだん凶々しくなつて話せるようにはなつたが、今でもぎこちがない。

ところが、キープサイレンスを守った我々も、卒業したあと、二つのタイプに別れた。同じように訥々型と、喋りだしたら止まらない型である。

自分の事は分らないが、人の事はよく分かる。昔、姑や嫂、義妹と洋裁を楽しんだ日々があった。先生は私の一年上級生であった田中和枝さん。彼女は卒業してから「立て板に水を流す」いや、「油紙に火がついた」のタイプで、私が貴女は俳句には向いていないと言ってしまったことを今でも後悔している。頭が良すぎて、全てしゃべってしまうタイプであった。

芦屋の我が家で毎月開催されている句会がある。その中に、私



の同級生がいる。彼女は寄宿には入っていなかったが、学校でもキープサイレンスを守らされて居たせいか、卒業してからよく喋る。私から遠くに座って居るが、何時も口がパクパク動いている。「Mちゃん、締め切り時間まではキープサイレンスよ」と、警告する。

「分かってる分かってる。ごめん、ごめん」

と暫く静かになるが、いつの間にか口がぱくぱく動いている。寄宿舎へ戻ってから、狭い部屋でタイプライターの稽古をする時間があつた。メンバーは六人のグループで、その部屋はキープサイレンスである。自主的に沈黙を守りながらタイプの練習をする。時間が経つと何となくお喋りが始まる。自主性ということ

で、始めは静かに練習をしても、何となく喋ってしまう。ガシャとドアが開いて、「皆さん、キープサイレンスですよ」マザーギブスである。「はい、すみません」声を揃えて謝るのは早い。ドアが閉まると「ねー何も悪いことは言っていないわよね」するとすぐ又ドアが開いて「貴女たち、喋る内容のことを言ってるではありませんよ。おしゃべりがいけません」

「はい、ごめん遊ばせ」口を揃えて謝ると又タイプライターに向かうのであつた。

「ねー、Mさんっておしゃべりじゃない」誰かが言う。

「いいの、いいの」

私は、そこへ到るまでの、キープサイレンスを知っているから文句は言わない。

「頭がいい証拠なのよ」

私はそのように答えることにしている。

